

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：23804

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720178

研究課題名(和文) 20世紀前半イタリアにおける短詩形：異国趣味と前衛のはざままで

研究課題名(英文) Short Form Poetry in Early-twentieth Century Italy: between Exoticism and Avant-garde

研究代表者

土肥 秀行 (Doi, Hideyuki)

静岡文化芸術大学・人文・社会学部・准教授

研究者番号：40334271

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：およそ一世紀前のイタリア南部の中心地であるナポリの芸術サークルを抽出し、一文化現象と呼びうるまで類型化し得た。これらのグループが、当時のイタリアと欧州レベルでの潮流である未来派といかにかかわったか吟味した。ナポリのローカルなグループにしても未来派にしても、「異国趣味」の流行によって知った日本の短詩形を、前衛としてとらえなおした上で受け容れている。よってイタリアにおける日本の短詩形の受容と実践の例を調べた。

研究成果の概要(英文)：Focused on Napolitan artistic circle of the Early-twentieth century, we examined its general and categorical characters, as of one cultural phenomenon; this group, how was related to Futurism, a big trend at European level at that time. They all accepted the short form poetry (translated from Japanese) after having re-captured it as avant-garde. Therefore, we picked up some important examples to see how fortune and practice of Japanese short poetry.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ語系文学

キーワード：短詩形 未来派 前衛 イタリア ナポリ

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初(2011年)の背景を説明するにあたり、まずは本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけについて述べる。

端的に言って、短詩形と前衛を結びつける視点はイタリアでは未発達といわざるをえない。「速さ」「短さ」を称揚した未来派は自ら短い詩作品を実践することはなかったが、日本の詩歌を評価しており、この点が従来の研究において見過ごされている。未来派における日本詩歌の影響については、むしろ日本の研究者が取り組んできた。といっても日本の詩人による未来派志向に関連した部分的な言及にすぎない。

本研究がはじまる頃、一般的な傾向として、二次的な未来派が注目を集めるようになっていた。地方における前衛運動の同時性が、新たな芸術の特徴として重要であるためだ。たとえば第二の未来派 Aeropittura (航空絵画)への関心や、地方における未来派のほりおこしといった動きがあった。2009年春、ボローニャ市では展覧会“5 febbraio 1909 Bologna Avanguardia Futurista” (“1909年2月5日未来派前衛ボローニャ”)が開かれ、Beatrice Buscaroli 監修によるカタログ (Bononia University Press 2009)にはこれまでにない詳細かつローカルな研究が寄せられている。こうした地道な研究は未来派の全体像を明かす上で欠かせない。南イタリア (ナポリ、プーリア地方)の未来派あるいは前衛の異国趣味を探求する申請者の研究もローカルな未来派研究のひとつとして位置付けられるであろう。

次にそれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯について述べる。

PD2年目の2008年においては、1910-20年代にイタリアで短歌などの翻訳をし、ナポリで同人誌 Sakurà を発行していた下位春吉について、ローマ大学で口頭発表を行い、2010年春には論集 *Giappone e Italia: le arti del dialogo* (Emil 2010)に論文を発表した。また日本では評伝を連載している(『イタリア図書』、2008.10、2009.4)。その際、彼が頻りに通った文学サークルの性質というのが課題として残った(彫刻家 Uccella の周囲)。さらに調査を重ねるうちに、プーリア地方にも日本の詩歌に影響を受けていたグループがあった。その場合は「秘密結社」的なものと推測されるに至った。この発見には Grazia Sebastiani, *Franco Casavola e la sua musica tra futurismo e tradizione* (Edizioni Dal Sud 1996)と Pierfranco Moliterni, *Franco Casavola. Il futurismo e lo spettacolo della musica* (Adda 2001)が役に立った。こうした日本の詩歌とイタリアの前衛の近接点をめぐるエピソードには、支えとしての歴史的・政治的背景があるのではないか、と考察を進めてきた。

以上が本研究テーマの着想の経緯である。この経緯は、『イタリア学会誌』(2011)に掲載された論文「初期ウンガレッティと20世紀の短詩形」で扱っている。

それまでの研究成果を発展させている点とはいうと、先述の仮説が真であるならば、下位が紹介した日本の詩歌が多くイタリア詩人に受け入れられたのは、秘密結社的な趣味が各地に共有されうる土壌があったということである。多くのイタリアの文人と同じように、下位が第一次世界大戦に「参戦」し、ファシズムに傾倒するのはその土壌をもとにしたということになる。

よって下位「伝」ではなく、彼がひとつの典型として挙げられるような文学者・知識人の型を抽出すること、それがこれまでの研究成果の発展形としてもとめられたのである。

2. 研究の目的

日本学術振興会特別研究員 PD として2007、08年度に行った研究「パゾリーニと20世紀イタリア短詩形:ヨーロッパと日本の詩の影響」が就職により3年計画の2年目で中断となったが、その継続と発展を第一の目的とする。さらには、従来の申請者の文学・書誌学・韻律学的アプローチに、政治学・社会思想的な性格を加えつつ、20世紀前半のイタリアにおける「前衛」「短詩形」「異国趣味」といった因子を繋ぐことを目的とした。

3. 研究の方法

書籍だけでなく雑誌論文を丹念に集め、そこから一次資料(手稿も含める)に遡るプロセスを経る。こうした中で先行研究者との関係作りも欠かせない。また既に申請者が構築している東京外国語大学、ボローニャ大学、フィレンツェ大学、ローマ大学などの日伊の研究者のネットワークに絶えず助言・協力を求めつつ研究を進める。

発表の機会を学会大会あるいは専門雑誌への投稿に限らず、ワークショップとそのフィードバックとしての論集というかたちで積極的に実現していく。最終的には単著あるいは論集に日伊両国で纏められるようにする。

4. 研究成果

初年度(2011年度)には、「遅れてきた」イタリアの象徴派を代表する詩人ウンガレッティの短詩形を中心とする初期作品群についての研究を進めた。これにはヴェネツィアとロンドンにおける調査が役立った。という

のも米英伊で活躍したパウンドや未来派との関係も確認できたからである。方言詩人パゾリーニにおける短詩形の研究(日本の短歌の影響も吟味)を補遺に含む初の単著 *L'esperienza friulana di Pasolini* (Cesati)のプレゼンを兼ねた講演会をボローニャ大学で行い、そこでの討論を通して、やはり短詩形をならした詩人ペンナについての翌 2012 年発表の論文へのヒントを得た。1930 年代のファシズム期に、短詩形にうたえてきたかにも自由な表現を行ったユニークな存在を確認できたからである。

2 年目(2012 年度)に入り、ナポリ国立図書館での調査をはじめると共に、「研究実施計画」に沿ってアウトプットを積極的に行った。最も大きな場が、研究代表者自らが企画運営したシンポジウム「ファシズムと文学 - 下位春吉をめぐる」であった。近年、下位についての研究を発表されてきた藤岡寛己氏と大内紀彦氏と共に当研究に資する討論の機会を得た。またパリでも未来派関連調査を行い、特にアポリネールと未来派の協働と反発について大凡明らかにした。イタリアとヨーロッパのアーティストの連携においては、運動における主導権争いが繰り広げられた。

3 年目(2013 年度)にはナポリとローマにあるゲラルド・マローネ関連資料を重点的に参照した。そこから下位春吉だけではなく、その他全欧レベルの芸術家たちのダイナミズムを知ることになる。やはり、1910 年代以降、未来派が支配的との一元的な見方は極めて限定的との理解にいたった。

3 年間に渡った本研究「20 世紀前半イタリアにおける短詩形：異国趣味と前衛のはざま」の成果を受け、文学の形態(詩形)の面から前衛の**横断的かつ共時的**な特質を浮彫にする試みは、予測通りの調査結果を得たと言える(グローバルな前衛像については拙稿「初期ウンガレッティと 20 世紀の短詩形」を参照)。と同時に、逸脱する例もみられ、前衛の複数性へと関心がいくようになった。こうした新しい課題は次の研究の糸口となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

土肥秀行

「初期ウンガレッティと 20 世紀の短詩形」
『イタリア学会誌』、第 61 号、2011 年、pp. 195-216

土肥秀行

「サンドロ・ペンナの短詩形 - 須賀敦子が最後に訳した詩人」

『和田忠彦先生還暦記念論文集』、2012/3、pp. 237-245

土肥秀行

「下位春吉とゲラルド・マローネ - ナポリにおける文学的交歓」

『イタリア図書』、第 48 号、2013 年 4 月、pp. 2-9

〔学会発表〕(計 5 件)

2012 年 12 月 14 日

静岡文化芸術大学 384 教室

シンポジウム「ファシズムと文学 - 下位春吉をめぐる」(企画・司会を担当)

研究発表「下位春吉とゲラルド・マローネ - ナポリにおける文学的交歓」

2013 年 10 月 19 日

富山大学 イタリア学会第 61 回大会

研究発表

「ゲラルド・マローネとナポリの前衛」

2013 年 11 月 9 日

星美学園短期大学 公開講座

「現代のイタリア詩人を読む - アレゴリー、短い詩とは」(招待有り)

2013 年 11 月 10 日

イタリア文化会館 研究集会「イタリア語研究者の集い」“Ricerca, scoperta, innovazione: l'Italia dei saperi”

研究発表

「*Harukichi Shimoi e l'avanguardia napoletana* 下位春吉とナポリの前衛」(伊語発表)

2014 年 12 月 14 日

掛川市竹の丸ゼミ

「イタリアにおける日本文化 - 短詩形の影響を中心に」(招待あり)

〔図書〕(計 1 件)

「文化と文化のはざま - 翻訳は裏切り、みえない本質をつく」

『国際文化学への第一歩』、すずさわ書店、2013、pp. 33-47 (共著、編集委員)

〔その他〕

ホームページ等

研究業績中心のプロフィール

<http://researchmap.jp/read0146667>

(公開可能なものはすべて PDF が DL 可能)

アウトリーチも含めた活動の記録

<http://www.ritsumei.ac.jp/~hidedoi/>

(研究業績に含まれない文学エッセイの PDF も掲載、DL 可能)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

土肥秀行 (Doi, Hideyuki)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・准教授

研究者番号：40334271

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし